

山と博物館

第42巻 第8号 1997年8月25日

大町山岳博物館



撮影 森 勝彦

ライチョウに魅せられて
森 勝彦

ライチョウの写真撮影をはじめて、早いもので十二年になる。

中部山岳の高山帯のみに生息し、人目につきにくのことなどから、その生態はまだ知られる部分が多いようだ。また、最近では絶滅危惧種と言われ、絶滅が心配されている。

そういう事も引きつけられる要因となつたのだろう。とにかく無我夢中で年中、山に登つた。

春は残雪がまだ多いが、比較的、樂に雪山を楽しむ事ができ、晴れた日には実に美しい写真を撮ることができるのだ。この時季はライチョウを見つけやすい頃でもあり、また彼等はなわばり争いに夢中になつて、人に対しても無関心のようだ。

夏はお花畑が美しく、また、下界の暑さがうそのように快適なのが一番の魅力である。ライチョウ親子が、登山者の足下を横切って行く光景は実に微笑ましいものである。ただ、五から六羽生まれたヒナも秋には一から二羽ほどに減つてしまい、大自然の厳しさを感じてしまう。

秋と言えば何と言つても紅葉であろう。下界の紅葉とは違い実にすばらしく美しい。この頃には、ライチョウのヒナも親と同じ大きさにまで成長している。

雪の高山。私はそれを神聖美と表現している。美しくも厳しい光景の中、清らかな純白の彼等に接すると何やら靈鳥たる所以を感じてしまう。ブリザードの中の彼等は力強くたくましい。あの小さな体からは想像できないパワーを感じ、感動的である。

これまで狂ったように山に入り撮影してきた。それは、ライチョウの不思議な魅力と彼等のメッセージを写真により表現したかったのだ。私が受けた感動をそのままに……。

最近の山登り

柳澤昭夫

「豊かになつたのか？貧しくなつたのか？」
 「豊かになつた。しかし、弱くなつた。」今、物質的には非常に豊かな時代を迎えたと、人々は異口同音に唱える。本当にそうであるかは別にして、少なくとも私の子供時代より、物質的には豊かになつた。

豊食、ファッショニ、エアコンの利いた快適な住居、車社会になって危険は増大したが、スーパー・マーケットへの買い物さえ車で行く。確かに大きな豊かさを手に入れた。暖房や冷房の利いた住居や職場、エアコンの利いた車は快適である。しかし、自然な寒さ、暑さ、涼しさ、濡れた不快感等々直接肌で受け止めることができなくなつた今、暑さ、寒さはもとより、自然の変化について行けなくなるのではないかだろうか。いうなれば、温室の中のような大きなシェルターの中で人間は生活しているのではないだろうか。シェルターの外、いうなれば大自然の中へ放り出されたとき、自然の中にある厳しさや危険に対応する知恵と行動力と体を失いつつあるのではないだろうか。

戦後の貧しい時代、過酷な仕事に働き通して耐ってきた今の五十年代、六十年代の中高年といわれる人々でさえ、その時代に培つたものを見失しつつある。まして豊かな時代に育つた若者には、もちろんない。朝早くから冷たい水田に裸足で入り、雨にぐつしより濡れながら旱苗を植えたような「つらさ」に耐えるというような経験は今の人にはない。

濡れること、寒さ、暑さなど「つらい」と長時間耐えるという力は確実に低下している。もちろんその気力も低下している。そればかりではなく、季節の移ろいやあるがままの自然に対する感動を失い、汗を流す充実感を失う。

心と体の強さ、優しさ、勇気、信頼など大切なものを自然とのふれあいを失う中で失うのではないかだろうか。

もし、そうであれば本当は豊かになつたのか、貧しくなつたのかを考えさせられる。

中高年登山者の問題点が指摘されているが

中高年登山者は増加した。山に溢れていると言つても過言ではない。大学山岳部員は減少した。社会人山岳会に若い人が入つてこなくなつた。冬山へ入山する人は少なくなつた。まして、冬季登攀を実践する人は、極端なくらい少なくなつた。

冬の岸壁で、取り付きの順番を争うような盛況は、見るかげもない。夏の剣沢のテント場に三百帳ものテントが溢れていた時代から、最近では二十から三十帳である。そのかわり、山は中高年齢登山者で溢れている。中高年齢登山者が増えたことを嘆いているのではない。

中高年といわれる世代は、戦後の混乱と飢えた時代をある意味では生活に追われ、今日の

がら旱苗を植えたような「つらさ」に耐える

というような経験は今の人にはない。

濡れること、寒さ、暑さなど「つらい」と長時間耐えるという力は確実に低下している。もちろんその気力も低下している。それ

ばかりではなく、季節の移ろいやあるがままで自然に対する感動を失い、汗を流す充実感を失う。

心と体の強さ、優しさ、勇気、信頼など大切なものを自然とのふれあいを失う中で失うのではないかだろうか。

もし、そうであれば本当は豊かになつたのか、貧しくなつたのかを考えさせられる。



繁榮する社会を築きあげた人達である。今はほんの少しの余裕を手に入れた時、人生に豊かさ、潤いをむさぼるように手にしたいと思ふのは当然ではないだろうか。今の人と違つて、家族で人生を楽しむことができなかつた世代である。自然に触れ、今改めて自分の人生に人間らしい豊かを求める急ぎを誰が責めることができるよう。多くの人達は、若いときに余裕を持てなかつた。確かに、知識も経験も少なく、その足取りは危なつかしく、おぼつかない。多くの問題を抱えている。しかし今、少しの余裕を手にして初めて、豊かさをむさぼるように求める人々である。出来得るならば温かい手を差し伸べてやりたい。

登山は、技術、知識、体力だけでなく、千変万化の自然を相手に行われる所以、経験の蓄積が大きな意味を持つ。人が自分一人で蓄積できる経験の量と質はたかが知れている。他の条件によつては、救助が困難であることは変わらない。

登山は、技術、知識、体力だけでなく、千変万化の自然を相手に行われる所以、経験の蓄積が大きな意味を持つ。人が自分一人で蓄積できる経験の量と質はたかが知れている。他の条件によつては、救助が困難であることは変わらない。

あると考へる。もちろん、あるがままの自然と対峙することを望む人は、反対意見もあるだろう。しかし、現実を直視すれば、少なくとも公衆トイレの整備は、今すぐに始めなければならない問題である。

登山は、その本質に未知との遭遇を求めて

いるが故に、危険を内包している。落石、浮き石、足場の崩壊、天候の急変など、予測しがたい危険や、ちょっととした判断ミスや不注意による危険が、急峻な山岳地帯であるだけに、内在している。事故の確率は他のどのよ

うなスポーツより高い。事故を防ぐこと、万一の事故は自分達で処理することが基本であることを否定する由ではない。しかし今、初めて山を登りだした人々に、高いレベルでの遭難事故対策を要求しても現実にそぐわない。

大勢の人々が山を楽しみ、人生を豊かにして欲しいと願うならば、登山者の事故に救援の手を差し伸べることに異議を唱える必要はない。ヘリコプター等々機動力が整備され、迅速な救助が可能な現在（必ずしもヘリコプター救助が可能ではないが）、未熟な人達の事故に対応した救助体制を整備することは益々重要になるだろう。もちろん天候、その他他の条件によつては、救助が困難であることは変わらない。

ムであれば、一人一人の経験が全員の経験になり、知恵として生きてくる。理論的、数量的に整理されたものは、技術書やノウハウとして書物から得ることができる。しかし生きる感覚的なものは、整理されにくく蓄積されにくい。ともすれば、マニュアル、或いはハウツウものに頼りがちであるが、マニュアルやハウツウものに欠けているのは、感覚的なもの、経験的なものである。整理されにくいものが欠けると全く役に立たないマニュアルと化すこともある。チームの持つ意味は、まさにそうした感覚的、経験的なものを知恵として生かしていく所にある。

今の人達は、組織に拘束されることを嫌う。

何らかの目的達成のためのプロジェクトチームを作ることではないから、タイトな組織でなくともよい。極めてルーズで、曖昧なチームでよいと思う。明確なものはなくとも、何か交換できるチームを作れば、感覚的なものや経験を蓄積できる。チームで、ほんの少しの信頼関係があれば、少なくとも、倍増する経験と知恵を手にすることができる。ルーズなチームであっても、チームを通じて情報や経験を手に入れる。或いは発信する基盤が整備されるからである。こうしたチーム間のネットワークがほんの少し整備されば、その上に、経験豊かな人の知恵と指導を手に入れることができるかも知れない。

少なくとも、登山に関する組織、ジャーナル、その他の発信を手に入れる可能性を見出したい。

ここ数年の間に山岳ガイドの組織化が進み、ガイドも研修を重ねている。まだ充分とはいえないが、こうしたガイドの力を借りるのも

中高年齢登山者には吉報かも知れない。

若い人の登山はどう変わってきたか

昭和は三十年代に入ってから、ようやく少しの余裕を手にして、登山も活発になりだした。折から、マナスル登頂の影響もあって、急激に登山者が増加した。

当時はまだ、冬季未踏ルートが数多く残されていた。穗高や劍、鹿島槍などのヴァリエーションの冬季登攀が盛に実践された。

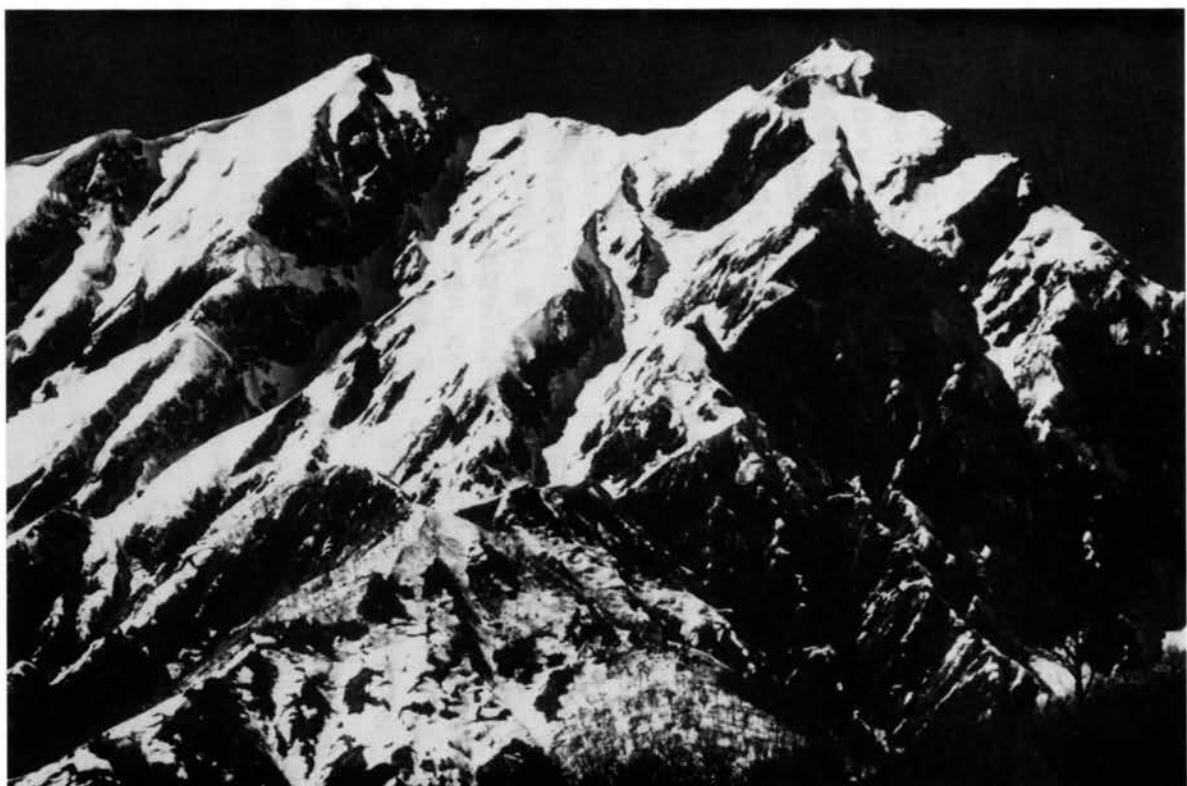
やがて、今までの技術と整備をもつてては不可能であった穂高の屏風岩や黒部の丸山東壁、奥鐘山西壁、唐沢岳幕岩、赤石沢奥壁などの大岩壁に、埋込ボルトと人工登攀の技術が導入され、ルートが拓かれる。穂高や劍の数倍に当たる。オーバーハンプを含むスケールの大きなルートが次々と初登攀されてゆく。

当時のクライマーには、大岩壁の登攀、そして冬季登攀という明確な目標があり、その成果を競う時代であった。多くのクライマーが参加した。特に社会人山岳会の先鋒的クライマーが登山界をリードしていった。

エベレスト（ヨモランマ・サガルマータ）が登頂されたときに、世界のクライマーは、ヒマラヤ、鉄の時代が到来することを予感していたはずである。大遠征隊から小規模なチームへ、ヨーロッパアルプスを登るような、アルパインスタイルへ、そしてビーグハントから、より困難な峰やルートへと目を向ける。

フランスのジャヌー、ボニントンのアンナブルナル、マカルー西稜へと、歩く登山からよじ登る登攀、クライミング主体の登山へと当然のことながら発展する。

ヒマラヤの大岩壁を目指して、冬季登攀や冬季の岩壁を継いで登る縦続登攀を実践し、或る者はヨー



鹿島槍ヶ岳



奥穗高岳と涸沢岳

ロツバルバスで鍛え、ヒマラヤの岩壁や氷壁を目指した。

かつて、誰もがヒマラヤを目指すことは金銭的にも難しかった。経済の高度成長を経て、ヒマラヤへ出かけることもそう困難でなくなり、大勢の人々が出かけるようになると、情報と経験が飛躍的に増加した。高度の影響も次第に明らかにされたりわけ、高所へ順応するための方法を含めたヒマラヤ登山の教科書、技術書、登山指南書なども生まれた。

一方、ヒマラヤへ出かける日本人は多くなつたが、国内での課題を設定しにくく、その多くの人達は、厳しいトレーニングや冬の登攀で鍛えることなしに、高峰を目指す。当然一部の人を除いて、高峰における困難なクライミングに挑戦することはあり得ない。ますます世界のクライマーとの力量の差が広まっていく。

した。
山行日数も内容も貧しくなってきた。
登山における組織（クラブ）の持つ意味は
単なる同好者の集団ではない。実践のために
組織的、科学的トレーニングを行い、技術を
研究し、必要な知識を学習する。

ら、ごく普通の人が八千メートル峰の頂上に立てるのである。リッジウエイではないが、「ちょっととエベレストまで」の時代を迎えたのである。エベレストの頂上に立った人は六百人を越え、八千メートル峰の山頂に立つのは、そう特別なことはなくなつた。ヒマラヤを目指して、厳しいトレーニングと冬の登攀を積み重ねなくとも、良きリーダーと現地ガイドの助けと、幸運に恵まれれば、普通の人が八千メートル峰サミッターという特別なになつてしまふ。

一方、ヨーロッパアルプスやカフカズの大岩壁で鍛えた人々は、ヒマラヤの大岩壁で、極めて困難なクライミングを展開する時代に入る。氷河河を聞く。ヨーロッパのクライマーはもとより、ヨ

一方、ヨーロッパアルプスやカブカズの大岩壁で鍛えた人々は、ヒマラヤの大岩壁で、極めて困難なクライミングを展開する時代に入る。氷河に削られた鋭い岩峰と急峻な岩壁で構成された六千から七千メートル峰の垂直で困難な岩壁にルートを開く。ヨーロッパのクライマーはもとより、ヨセミテやアラスカで鍛えたアメリカのクライマーと共にユゴースラビア、チエコ、ボーランド、ハンガリー、スペインなどのクライマーが素晴らしいクライミングを展開する。ジャヌー北壁やロードウェイ南壁を単独で登攀した。トモ・チエセンのように、まさにスーパースターが出現した。実際、ケドルナートドームのハンガリールートやバギラティのユゴスラビアルートを見ると、彼らの力量の大きさに啞然とする。

大自然に翻弄される登山である。常に事故の備え、対応できる力を養つてゆくのもクラブの大きな存在理由である。強風、雨、吹雪荒天の時、山は牙を剥ぐ。骨の髓までしみ透る寒気や、風雪に耐え、命を守らなければならない。山に易しい山はない。耐える力と事故に対応する力は、今のクラブでは確実に低下してきている。ちょっと荒天に遭遇すれば救助を求める、チームとして遭難対策機能を全く失ったクラブさえ出現した。

“クラブは仲良しサロンになつた。”
しかし、全ての若者やクラブがそうであるわけではない。一生懸命なクラブには人が集まり、発展しつつある。

、クラブは仲良しサロンになつた。しかし、全ての若者やクラブがそうであるわけではない。一生懸命なクラブには人が集まり、発展しつつある。

やがて、クラブは再編成され、また違った山登りを摸索し、創造するだろう。いつの時代でも、概ね健全な方向に若者が歴史を担いでゆく。(文部省登山研修所)



エベレスト諸説紛糾

丸山喜康

世界最高峰「エベレスト」Mount Everest: 標高八、八四八m (北緯 $27^{\circ}59'16''$ 東經 $86^{\circ}55'40''$) ネパールと中国チベット自治区との境界線上に位置しグレー・ヒマラヤ、クーンブ山群の核心部に位置する世界の最高峰。一九五二年、イギリス隊(ジ・ハント隊長)によりネパール側の南東稜より初登頂された。

撮影 矢口勝義

一八四九年から五〇年にインド測量局が南インドのヒンドゥスタン平原からヒマラヤの高峰の測量を行った。一八五二年、インド大測量の結果の集計中に「ピークXV (第一五番の峰)」と仮番号名称で呼ばれていた峰が世界の最高峰として「発見」されたのである。インド測量局は地名には現地呼称を採用するという方針に従つて現地名を探したが、当時はチベットもネパールも鎖国の状態で見つけだせず、やむなく一八二三年から四三年までインド測量局長官として功績のあったジョージ・エベレスト (George Everest) 嘴の名前をとつて「エベレスト」とする事が一八六五年当時の測量局長官アンドルー・ウォーにより正式決定された。それ以来、エベレスト山が世界の最高峰として知られ、定着していった。

ヒマラヤ八、〇〇〇mの高峰に西欧の人々が唯一ついた特例でもあった。これもそのころ政治的にもインドを中心とする一帯を支配していた大英帝国(イギリス)の威

「世界で一番高い山の名前を知っていますか?」答えは「エベレスト」。たぶんほとんどの人はこう答える。しかし、貴方は「エベレスト」をどれだけ知っているだろう。今回のは、世界の一番高い山、世界の「てっ�ん」をひと味違った観点から雑学をふんだんに駆使し記してみたいと思う。反論・疑問等を持つ方もあろうかとは思うが、諸説紛糾大きいに結構。あまり堅く考えずに読んでいただけたらと思う。

1. 世界最高峰としての「エベレスト」を発見したのは誰か?

一八四九年から五〇年にインド測量局が

2. 世界最高峰はなぜ三つの名前を持っているのか?

エベレストという名前の他に、「チョモランマ(Chomolungma)」・「チベット」「チョモランマ(Jolmo Lungma)珠穆朗瑪峰」・中国「サガルマタ(Sagarmatha)」・ネパール」と三つの名前で呼ばれている。

エベレストと名前が付いてから数十年して地呼称を採用するという方針に従つて現地名を探したが、当時はチベットもネパールも鎖国の状態で見つけだせず、やむなく一八二三年から四三年までインド測量局長官として功績のあったジョージ・エベレスト (George Everest) 嘴の名前をとつて「エベレスト」とする事が一八六五年当時の測量局長官アンドルー・ウォーにより正式決定された。それ以来、エベレスト山が世界の最高峰として知られ、定着していった。

ヒマラヤ八、〇〇〇mの高峰に西欧の人々が唯一ついた特例でもあった。これもそのころ政治的にもインドを中心とする一帯を支配していた大英帝国(イギリス)の威

3. 世界の最高峰は 実はエベレストではない?

一九八七年三月、「K2はエベレストよりも高かった?」という新聞報道があつたのを見えていただろうか。

ここで言うK2とはパキスタンと中国との国境に位置するカラコルムの最高峰、世界第二の高峰(標高八、六一一m)のことである。発端はアメリカ、ワシントン大学のジョージ・ウォーラスティン博士が航空衛星(NNS)を使ったGPS(グローバル・ポジショニング・システム)の略で航空衛星からの電波を地上で受信、その地点の緯度・経度・高度を求める方法でK2のBC(ペース・キャンプ)の高度を求めた結果「測量地

信絶大な時代だったからもある。ただ、この測量を実際に行い世界の最高峰を発見したのは誰なのかは「インド測量局」の計算所長であつたインド人ラードハーナート・シクダールなのか? あるいはアングロ・インド人のヘネシーなのか? はたまた他の若手測量技師のうちの誰かなのか? またパンティット(Pandit・本来学者の意だが事実上のスパイ)と呼ばれた外国人の入国が困難な地域に派遣された測量技術を教え込まれたインド原住民なのか? 確定のためのあらゆる努力にも関わらず、未だ「エベレストを発見したのは誰なのか」は確定されていないのである。

(エベレストの発見された一八五一年は、日本では幕末の嘉永五年。翌六年にはアメリカのペリー艦隊来航の年に当たる時代である)。

エベレストの名前は使うことが義務づけられ、「エベレスト」の名前は使うことが出来なくなっている。また日本の登山界においても「エベレスト」の名前は徐々に死語になりつつある。本来のエベレスト保有国が自国語による正規の名前を主張し始めたのである。

しかし「世界の最高峰?」と問われると、即座に「エベレスト」の名前が思い浮かんでくる。それほど「エベレスト」という名前は有名になりすぎてしまったのである。

今回は、捨てがたくまた有名な万国共通統一名「エベレスト」の名前を使用しておきたいと思う。

にあるため「第二の女神」などの説もある。またネパールでは近年になってサガルマタの呼称を与えている。ネパール語でSagar (サガル)は大空、世界の意で、mata (マータ)は頭、頂上を意味するという。したがって「大空の頭」「世界の頂上」の意味がある。

点の高度が従来より二五〇m内外高く出たのでK₂もその分高いはず」となった。これでいくとK₂は控えめな計算で八、八五八m、ある計算では八、九〇八mとなりエベレストの八、八四八mを抜いて世界第一位となると外電は伝えたのである。

真偽を確かめるため一九五四年のK₂初登頂時のイタリア隊の隊長である地質学者アルデイート・デジオ教授は一九八七年七月から八月にエベレスト北面とK₂南面からGPSを利用しエベレストは四カ所の異なる地点から経緯儀で頂上を測定、NNSは四個の異なる衛星を使い正確を期した。K₂は同じくGPSを利用し三kmへだつた二カ所の異なる地点を定め頂上を測量した。その結果エベレストが八、七二m、K₂が八、六一六mと出て、逆転どころかエベレストが二四m高くなつて五mしか増えなかつたK₂との差を広げて世界最高峰の座を守つた。

しかし世界にはエベレストより高い山が実際に存在するのである。現在、陸地の高さ「標高」は海拔（平均海面よりの垂直高）で表される。エベレストも海拔八、八四八mとなるのであるが、ここで海拔を無視し地球の中心から垂直高を求めるはどうなるか？ そうすると地球の中心から地球の一番高い出っ張りは南米エクアドルにあるエクアドルアンデスの最高峰「チンボラッソ山（Chimborazo、Nebado。標高六、三一〇m）となると言うのである。実際一七四五五年から一八一八年までの間（一八一八年にネバールのダウラギリ峰が標高八、一六七mと測量されるまで）世界の最高峰として考えられていたのもおもしろい。ではなぜか？ 地球は正確な球でなく南北に潰れた楕円体であることはニュートンにより発見されている。計算によつても地球の中心と北極との距離は六、三五七km、赤道との距離は六、三七八km、その差が二二km（二一、〇〇〇m）あるのである。この距離に標高がプラスされると赤道付近にある最も高い

山が地球の中心から一番出つ張つてゐることになるのである。このように見方の違いで世界の最高峰は簡単に入れ替わるのである。

4. エベレストは成長伸び盛り？ 世界最高所到達記録保持者は誰か？

エベレストの頂上付近には黄色味がかつた縞模様が見られる。これは石灰岩の地層である。石灰岩は海水中の石灰分が沈殿したり、貝殻のような生物体の石灰質の部分が海で積もつて出来る。この石灰岩の地層は、今からおよそ三億年から一億五〇〇〇万年前に深い海底で出来上がつたものである。つまり、エベレストは大昔、深い海の底であつたことがわかる。ところが二〇〇〇万年前のころから、この深い海底が急激に持ち上がり始めたのである。そして一五〇〇万年前から陸化し始めたと考えられる。原因是インド半島（インドブレーント）にある。インド半島は以前は南半球の南極大陸付近にあつたが、これが北上してアジア大陸（アジアブレーント）に激突して下へ潜り込む形となつた。これによりアジア大陸が異常に上方へ押し上げられしづが寄り、このしづがヒマラヤ山脈を形成したのである。

これは一九一二年ドイツの地球物理・気象学者ウエゲナーが発表した「大陸移動説」もとづく造山運動（ブレーントテクトニクス）である。現在もこの潜り込みは続いており、今でもエベレスト付近は毎年およそ平均三mmの割合で隆起していることが観測されている。

5. エベレストはこれ以上成長しないと言うのはほんと？

前文を否定するおもしろい仮説がいくつかあるので紹介しよう。

エベレストの高さは圏界面とほぼ同じ高さにある。圏界面とは雲があり雨が降る対流圏とその上の成層圏の境目で、ここから上には雲がない。故にエベレスト級の山は、昼間雲に遮断されることなしに太陽光線が照りつけ、岩肌の雪は解けて岩の割れ目にしみこむ。夜になると今度は岩肌からの放射冷却が雲に遮断されることなしに進み、岩は冷却され水が凍つて割れ目が抜けられる。このような風化によつてゆっくりと上昇してきた高峰が削られる。だからエベレストの高さは圏界面よりも少し低いところで落ち着いているという説。

また、上空のジェット気流（最大風速は秒速一〇〇mを越えることがある西風で大気中

一一番高いところ）、現在は前文によると初登頂より四三年経過しており、そして年間三m隆起していることを考えると四三年×三m=一二九m初登頂時より高くなつてはいるはずである。こうなると毎年最高所到達記録は更新されていたことになるはずである。

（実は日本でも丹沢は小さいながら一つの独立した造山運動によつて出来た山塊である。

斐リピン海プレートに乗つた丹沢地塊がま

ず本州に衝突し、斐リピン付近にあつた伊豆半島がその後本州に衝突した。この衝突によつて出来たしわが丹沢であり、また衝突によつて地下の温度が高くなり富士山や箱根の噴火が引き起こされ富士山が誕生したと言うのである。また日本の山の隆起量であるが、日本列島の山地全体では一から二m／年が平均の隆起量である。最も隆起量が大きいのは南アルプスで年間四mである。）

（山岳博物館嘱託員）

（山岳博物館嘱託員）